倫研新報

一般社団法人 倫理研究所

発行所　一般社団法人 倫理研究所
東京都千代田区紀尾井町4-5
電話 03(3264)2251(代)
発行責任者　前川朗義
非売品

ホームページ　www.rinri-jpn.or.jp
Eメール　shinpou@rinri-jpn.or.jp

誓いの言葉
今日一日
朗らかに安らかに
喜んで進んで働きます

【今号の主要記事】

2面／物故会員功労者奉恩式
　　／青年倫理塾―熊野三山巡る
5面／自主企画・新入社員セミナー
6面／北海道で倫理経営塾スタート
8面／富士高原研修所60周年式典
　　／「倫理研究フォーラム」閉幕

地道な実践と継続称える
第29回地球倫理推進賞 贈呈式

地球倫理とは、地球の安泰を最高目標とする、地球人の、地球人による、地球人のための倫理。その理念に基づき、地球的視野に立って社会貢献に取り組む団体を顕彰する「地球倫理推進賞」(後援／文部科学省、産経新聞社、全国民間放送ラジオ局三十七社)は、今回で二十九回を迎えた。三月二十九日に都内千代田区の都市センターホテルで贈呈式が開催され、三二五名が出席した。

左から国際活動部門の西山美希事務局次長、仲佐保代表理事、国内活動部門の渡辺豊博専務理事、緒明春雄理事

今回の応募総数は五十八件(国際活動部門二十四件、国内活動部門三十四件)。三次にわたる厳正な選考の結果、国際活動部門は「特定非営利活動法人シェア＝国際保健協力市民の会」(東京都台東区)、国内活動部門は「特定非営利活動法人グラウンドワーク三島」(静岡県三島市)が選出された。

＊

式典では、五名の選考委員を代表して津田塾大学名誉教授の三砂ちづる氏が講評を述べた。

続いて、丸山敏秋理事長より、シェアの仲佐保代表理事と西山美希事務局次長、グラウンドワーク三島の渡辺豊博専務理事と緒明春雄理事に、それぞれ表彰楯と副賞百万円が贈呈された。

また両団体には、文部科学省総合教育政策局地域学習推進課課長補佐の齊藤陽介氏より、文部科学大臣賞の賞状が授与された。齊藤氏は両団体の活動を称え、「社会教育の原点を再確認する思いでした」と所見を述べた。

表彰に続き、両団体が活動報告を行なった。

式典の最後に、主催者を代表して丸山理事長が挨拶に立ち、関係者への御礼を述べた。次いで地球倫理の提唱者である故・丸山竹秋会長の言葉を引いて地球倫理の意義や重要性を説き、本賞へのさらなる支援を呼びかけた。

贈呈式には、倫理研究所の青年会員による「地球倫理青年協議会」メンバーも参加し、両団体の活動報告に聞き入った。高い目標に向かい足下の実践を継続する姿勢に、青年たちは大きな示唆と感銘を受けた。

「公平な世界」実現に向けて
シェア＝国際保健協力市民の会

東南アジアを中心に四十年以上、地域に根ざした保健医療の基盤づくりに取り組んでいる、日本でも屈指の国際保健団体。支援地域の住民のニーズに十年単位で寄り添い、医療の提供、乳幼児健診や離乳食教室などの栄養改善事業とともに医療者教育、保健行政の強化を支援する。「いのちを守る人」を育て、住民が自律的に健康づくりを進められる体制を整えることが目標だ。日本国内では、医療アクセスが困難な外国人への支援にも注力する。

現在も、世界の死亡原因の半数以上は本来なら予防や治療が可能な疾患であり、その九〇%が低所得国に集中する現実がある。仲佐代表理事は「世界にはさまざまな格差があり、その影響を最も強く受けるのが保健・医療分野。中でも、母親と子供は取り残されやすい」と指摘する。この問題意識の原点には、仲佐氏自身の体験がある。若き日に医師として難民支援の現場に赴いたとき、まず必要とされているのは食料や水、医療体制だった。自身の技術が命を救えない現実を前に、持続可能な保健活動の必要性を痛感したという。

同会の名称は、国境なき医師団の機関紙『Bon partage(公平な分配)』に由来する。活動報告では「格差が拡大する中、取り残される人々を救うために、今後も地道な活動を続けていきたい」と決意が述べられた。仲佐氏は、人々の健康格差だけでなく、その背後にある社会の不公正にも目を向ける。政策提言を通じた社会改善にも意欲を燃やし、「すべての人が健康に暮らせる世界」を目指して歩みは続く。

移動診療で栄養不良児を早期発見する〈シェア〉

大勢で川のゴミ拾い〈グラウンドワーク三島〉

環境改善を「自分事」に
グラウンドワーク三島

昭和三十年代、三島市は富士山からの湧き水が町中に流れる「水の都」だった。しかし、高度経済成長期の開発や森林の管理放棄により、水辺の環境は急速に悪化。水場にはゴミが散らばり、川はドブ川となって放置されていた。同会は三十年以上にわたり市内の源兵衛川の清掃、浄化に取り組み、自然環境を改善。三島市を「せせらぎのまち」として全国に広めただけでなく、市民主体のまちづくりと自然再生のモデルとして国内外から評価を受ける。

グラウンドワークとはイギリス発祥の、地域住民、企業、行政の三者がパートナーシップを組んで行なう環境改善運動。立場や役割の違う三者が効果的に協働するには、お互いの信頼関係が重要だ。同会は中間支援組織として、関係者間の合意形成、資金の確保などの調整・仲介業務を担当。持続可能な活動の形成に力を注ぐ。設立の中心となった渡辺専務理事は、「当会の役割は『環境問題は自らの手で解決していくもの』という意識を仲介し、社会に拡げること」と語る。

活動の原点は、渡辺氏が一人で始めた源兵衛川の清掃にある。幼少期に親しんだ自然への思いを胸に、〈まず現場へ〉と、愚直に行動を続けた。また、自ら市内の井戸や水源を調査して得られたデータをもとに粘り強く企業や行政へ働きかけた。次第に賛同者が増え、協働の輪が拡がり、グラウンドワークとして組織的な活動に発展した。

渡辺氏は「市民には潜在力がある」と強調する。まちづくりの主体となる市民の実践学校として、これからも「水の都・三島」を次世代につなぐ地道な活動を続けていく。

選考委員講評(要旨)

シェア＝国際保健協力市民の会

わが国における、志ある医療関係者による国際協力団体の先駆けとして、国際保健の現場で、現地の人々が主体になる「プライマリーヘルスケア」を一貫して実践してこられた。わが国の国際保健の実績向上と人材育成に大きく寄与し、国内でも在日外国人の医療の問題に早くから取り組む。幅広く先進的な活動は、まさに地球倫理の理念に合致するものと言える。

グラウンドワーク三島

限定された地域内の活動ではあるが、30年にわたる地道で着実な取り組みにより、地域創生のモデルケースといえる成果を上げてこられた。大規模な社会問題に目を向ける重要性は言うまでもないが、同会は自身の足下を磨き上げることが大きな成果を生む可能性を示唆しており、地球倫理の実践そのものだ。こうした取り組みが拡がり、第2・第3の三島市が生まれることにも期待したい。